

# 座光寺原遺跡

座光寺スマート IC 接続道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022 年 3 月

長野県飯田市教育委員会



# 例言

- 1 本報告書は、飯田市建設部が計画した座光寺スマート IC 接続道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地座光寺原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査対象地は長野県飯田市座光寺 211 番 3 に所在する。なお、調査地の路線名は市道座光寺 168 号線だが、今後建設予定の座光寺上郷道路と接続後に路線名は変更される予定である。
- 3 本件は令和 3 年度（2021 年度）に発掘作業および整理作業を実施し、本報告書を刊行した。
- 4 調査略号は ZKB211-3 を用いた。
- 5 発掘調査は飯田市建設部から委託を受け、飯田市教育委員会が直営で実施した。調査体制は以下のとおりである。

## (1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	代田 昭久		
調査担当者	春日 宇光				
作業員	伊東 裕子	木下 由紀子	関島 真由美	樋本 宣子	
	中田 恵	福澤 育子	宮内 真理子	森山 律子	吉川 悦子

## (2) 事務局体制

### 【令和 3 年度】

#### 飯田市教育委員会

参与（教育次長事務取扱）	松下 徹	
文化財保護活用課長	馬場 保之	
文化財施設整備担当専門幹	関島 隆夫	
文化財保護活用課長補佐兼文化財担当主幹	宮澤 貴子	
文化財保護活用課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行	
文化財保護活用課文化財保護担当専門主査	吉川 金利	
文化財保護活用課文化財保護係	澁谷 恵美子	春日 宇光

## (3) 指導・協力

長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課

- 6 本件に伴う業務委託は、以下のとおりである。  
基準点測量・地形測量・標高析出：株式会社小林コンサルタント
- 7 本文は春日宇光が執筆し、馬場保之が総括した。
- 8 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館（飯田市上川路 1004 番）で保管している。

# 目 次

## 例言

第1章	調査の概要	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	発掘作業および整理等作業の経過	2
第3節	発掘作業および整理等作業の方法	2
第2章	遺跡の位置と環境	4
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	4
第3節	周辺の調査履歴	6
第3章	調査の成果	7
第1節	基本層序	7
第2節	遺構と遺物	7
第4章	総括	10

## 写真図版

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査にいたる経緯

### 1 協議の経過

飯田市建設部（以下「事業者」）は、座光寺地区に所在する中央自動車道座光寺パーキングエリアをスマートインターチェンジ（以下「スマート IC」）化し、上郷飯沼地籍に開発が予定されるリニア中央新幹線長野県駅と接続する計画を進めてきた。座光寺パーキングエリア周辺は埋蔵文化財包蔵地「座光寺原遺跡」および「大門原遺跡」に該当しており、スマート IC から県道飯島飯田線までの整備が他の道路建設に先行する見通しとなったため、埋蔵文化財の保護について長野県教育委員会の指導・助言のもと、事業者と飯田市教育委員会（以下「市教委」）との間で協議を実施した。

平成30年4月17日付で文化財保護法第94条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知が事業者より市教委経由で長野県教育委員会へ提出された。これをうけ、同23日付で長野県教育委員会から発出された通知により、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行う運びとなった。その後も事業者と保護協議を進め、事業地の発掘調査は市教委が受託することで合意に至った。

### 2 確認調査

建設予定地内での本調査の要否を判断するため、市教委はスマート IC 本体及び周辺接続道路用地に対し、平成30年度から令和元年度にかけて確認調査を実施した（図1、写真図版6～8）。用地の大半は畑地であり、主に果樹が栽培されていた。

#### （1）平成30年度調査

当年度の調査対象地は大門原遺跡を主とし、一部は座光寺原遺跡に該当していた。スマート IC 本体及び上り線側の接続道路予定地に5か所（図1トレンチ1～5）、同南側に2か所（図1トレンチ6・7）のトレンチ調査区を設定した。地表から30cm～100cmの厚さの表土（耕作土）の直下に明黄褐色シルト質壤土が露出し、この上面を遺構検出面として確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。表土と遺構検出面との間に漸移層はみられず、耕作等による影響が及ぶ。

#### （2）令和元年度調査

当年度の調査対象地は座光寺原遺跡に該当した。主にスマート IC 本体南側の下り線側接続道路予定地に対し、8か所（図1トレンチ8～15）の調査区を設定した。堆積環境は平成30年度調査とほぼ同様で、遺構検出面までの深度は40cm～80cmであった。

調査の結果、県道飯島飯田線に近いトレンチ15（市道座光寺168号線用地）で竪穴建物とみられる遺構を検出し、本調査の必要があると判断した。その他トレンチでは遺構・遺物は検出されなかったため本調査不要とし、事業者と長野県教育委員会に結果を報告した。

確認調査終了後、遺構検出地点の本調査時期については市教委と事業者で改めて協議のうえ実施することとし、トレンチは写真・測量による記録後に埋め戻し、検出遺構を一時保存した。

その後の事業者との協議により、埋蔵文化財発掘調査委受託費の負担について令和3年8月5日

に公文書による合意に至った。調査は秋から冬頃に実施するものとし、地区説明会等で住民に通知した。11月初頭に各種委託業者を選定し、調査に着手した。

## 第2節 発掘作業および整理等作業の経過

現地での発掘作業は、令和3年11月15日に開始した。15日午前中に重機(バックホウ)を搬入し、表土掘削を開始した。掘削箇所は確認調査の成果を参照した。また、用地内に仮設トイレ1棟を搬入した。同日午前中に表土掘削が完了したため、作業員による遺構掘削作業に移行した。竪穴建物SI001は15日から17日にかけて掘削、図面作成、写真記録等を行った。17日までに記録作業がほぼ終了し、18日午前中に委託業者による調査区測量および航空写真撮影を実施した。同日午後調査区を埋め戻し、これをもって本件に係る現地作業を終了した。

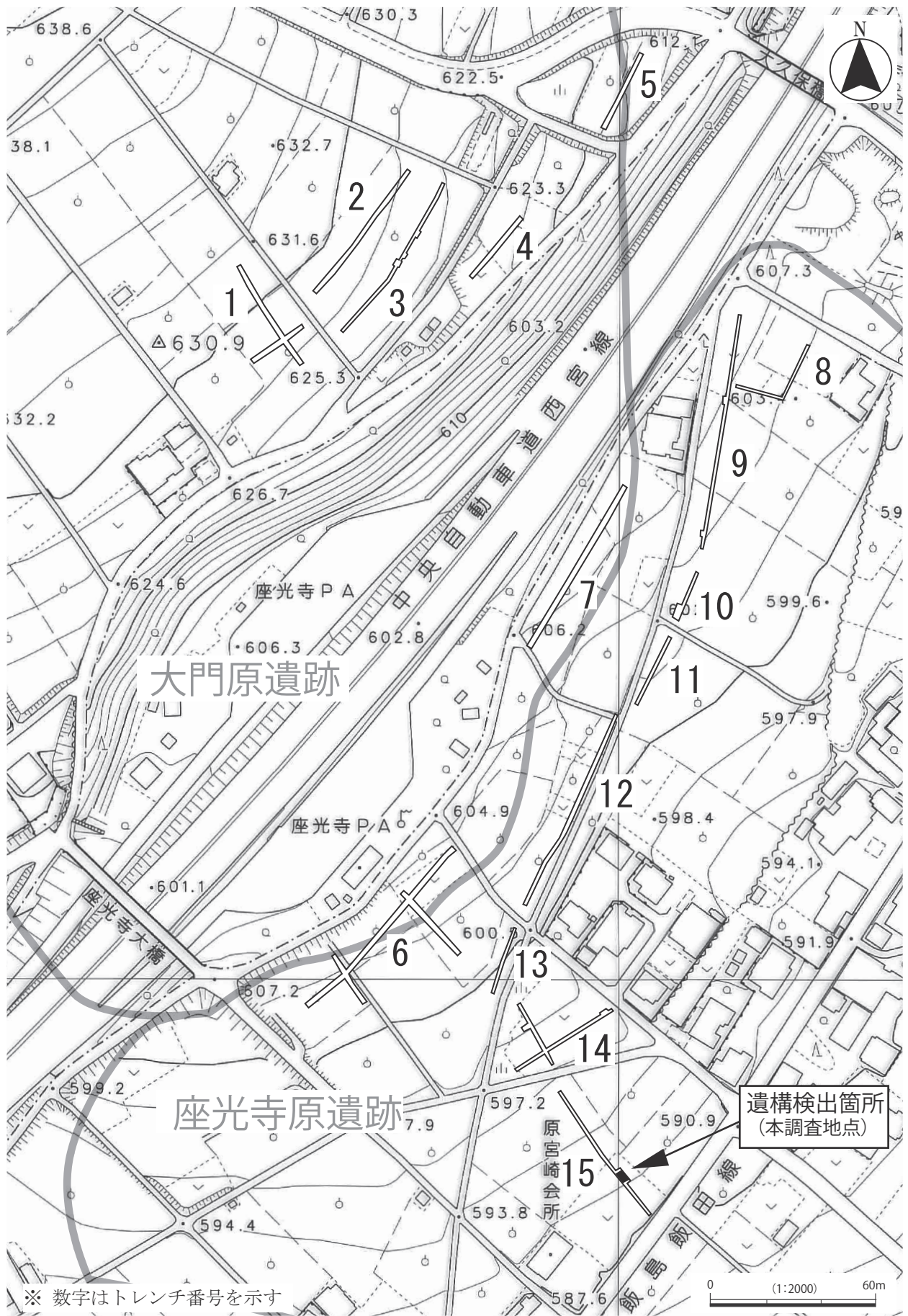
整理作業および調査報告書刊行は当初より令和3年度中に実施することとしており、発掘作業終了後、飯田市考古資料館で整理等作業を行った。作業は調査担当者の指示のもとで作業員が行い、遺物の洗浄、注記、接合・復元、遺物実測、拓本取り、原図の整理及び清書等を順次進めた。遺物写真撮影は整理期間中に調査担当者が実施した。報告書編集にあたっては、調査担当者が委託期間中に原稿の執筆、写真図版の作成を行った。調査報告書の印刷業者を令和3年12月に選定し、翌令和4年3月に本報告書を刊行した。

## 第3節 発掘作業および整理等作業の方法

当市教委では本調査に際し、世界測地系に基づく独自の区画方法(市教委 2009)に準拠し、2m×2mの正方形小区画(グリッド)を設定することとしている。ただし今次調査においては調査範囲が狭小であり、記録作業上の必要性が認められなかったため、グリッドによる区画を設定しなかった。したがって、調査区の位置情報の記録は、委託業者による測量によった。

重機による表土掘削を最初に行い、遺構検出後は作業員による人力の掘削へ移行した。遺構は001から通し番号を付与した。竪穴建物SI001は四分法により、土層観察用の畔を残した状態で掘り下げ、土層堆積状況を観察・記録した。建物内の土坑やピット等からの遺物は、遺構番号に加えて建物内の出土位置に関する情報を付して取り上げた。また、必要に応じて出土状況図を作成した。本調査中の写真記録は、デジタル一眼レフカメラ(Nikon D750)を使用した。

遺構等の図面類は現地で作成した実測図を基に第二原図を作成し、それをもとにAdobe社製ソフトウェア(Illustrator)を用いてトレースした。報告書の編集は同社製ソフトウェア(InDesign)を使用し、文章、図、写真図版を作成・配置した。出土遺物はすべてを洗浄、乾燥を経て、個別に注記をした。その後、接合・復元・実測・拓本採り等を行った。注記は物理的に記入が不可能な微細なものを除き、全ての出土遺物に墨で手書きした。注記する際は、本調査の略号(ZKB211-3)、出土遺構名・出土年月日・その他情報の順に、アルファベット、ローマ数字及び平仮名を用いて記載した。遺物の接合は市販の接着剤を使用した。今次調査出土遺物は石材1点と未接合の土器片を除き、図化のうえ本書で報告した。



※ 数字はトレンチ番号を示す

図1 平成30年度～令和元年度確認調査トレンチ

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

当遺跡は長野県飯田市座光寺に位置する。飯田市は長野県南部の都市であり、標高3000メートル級の高峰が連なる木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼び習わされ、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流する。

伊那盆地では、山麓部から天竜川河床の間に比高差約数m～60m程度の段丘崖が数段にわたって発達するのが景観上の大きな特色である。このように区画された標高差のある平坦面は、念通寺断層付近を境に大きく「上段」（うわだん）と「下段」（しただん）に分かれる。上段や下段の一部にかけては、赤土の名で知られる風成ローム層が堆積し、その下は木曾山脈方面から土石流等により運搬されてきた花崗岩礫が占める。

当遺跡は高森町との境界に近い座光寺地区の北端部に位置し、伊那盆地西部山麓の扇状地上に所在する。『下伊那の地質解説』（下伊那地質誌編集委員会 1976）によると、当遺跡一帯は「中位段丘・中期扇状地」に区分され、松尾地区八幡原付近を標識とする段丘面「八幡原面」と同時期の扇状地とされる。この段丘上には基本的に火山灰層が堆積し、その中に御嶽山の第1浮石層（約7～8万年前に降下）が含まれることから、これより前に形成された地形と考えられる。

遺跡の範囲は南北約950m、東西幅約520mと広範囲で、南東方向に緩やかに傾斜する扇状地である。最も高い地点は標高約600m、低い地点は550mであり、今次調査地点はおよそ590mである。北側に大門原遺跡、中釣根遺跡、南側に座光寺中島遺跡、座光寺宮崎遺跡がそれぞれ隣接する。

### 第2節 歴史的環境

市内における旧石器時代の遺跡は、山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡が後期旧石器時代の初頭頃とされ、日本列島最古級の遺跡として著名である。

縄文時代は早期から集落が形成される。特に中期後葉には集落が激増し、東海や関東、中部高地の影響を受けながら独特な土器群を創造するなど繁栄を極めるが、後・晩期は集落数が減少する。

弥生時代を迎えると、当地域に稲作が伝来し、生活様式が変化する。前期の様相はほとんど不明だが、中期になると低位段丘上に集落が発達し、湿地を生産域として農業生活が営まれる。後期になると集落が中位段丘から高所の山麓部にまで広がり、集落数も多くなる。座光寺地区では、低位段丘の恒川遺跡群が中期から後期にかかる大集落として知られるほか、当遺跡や座光寺中島遺跡など上段に後期の集落が広がりを見せるが、拠点的な集落をのぞき、多くは短期で廃絶する。

古墳時代の前期は前方後方墳が少数築造されるにとどまる。しかし、中期中葉以降は爆発的に古墳が増加し、後期後半まで活発な造墓を行う。近年、中期から後期にかけて飯田市域を中心に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を一体的にとらえ、「飯田古墳群」と呼称している。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。これらから、大陸から導入された馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定されており、13基の古墳が国史跡に指定されている。

奈良時代に律令制が導入されると東山道信濃国伊那郡に編入され、郡衙が設置された。座光寺地



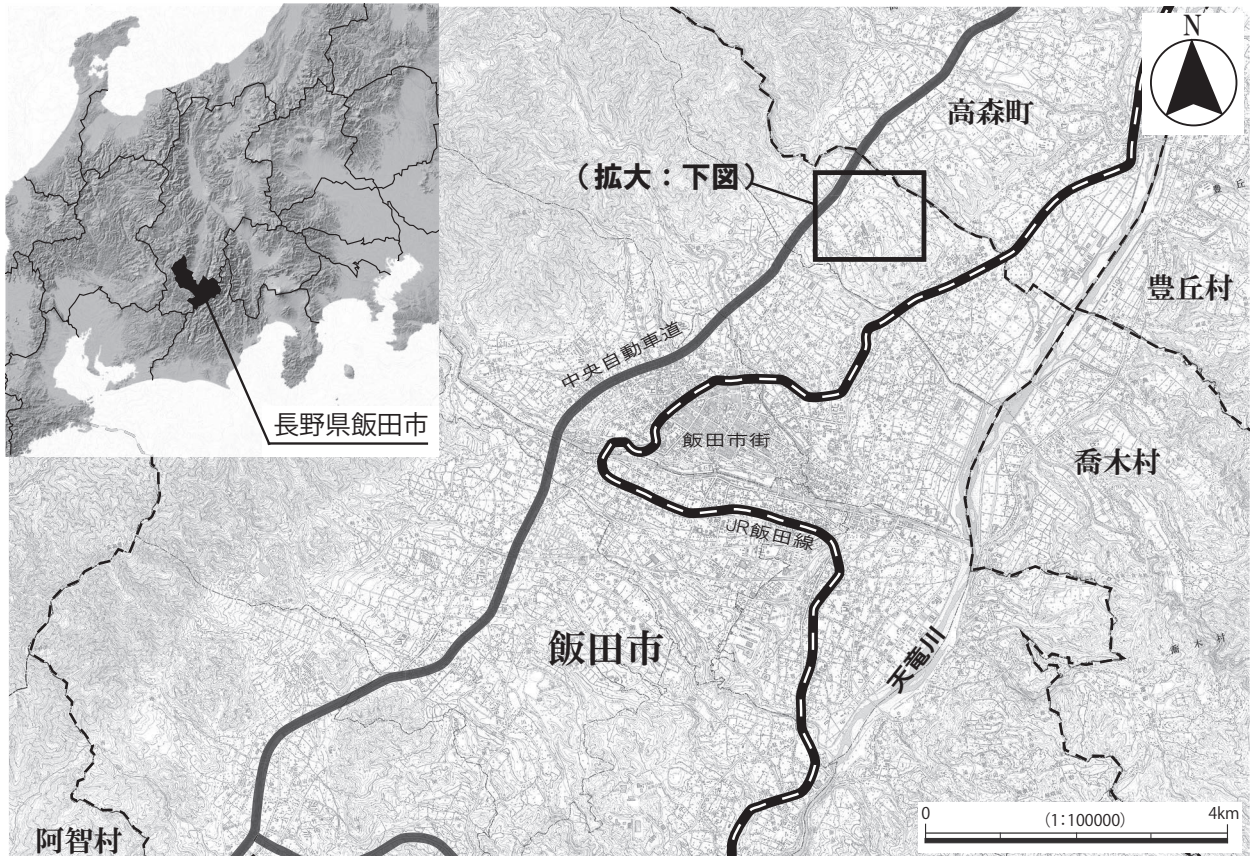


図2 調査位置 (1)

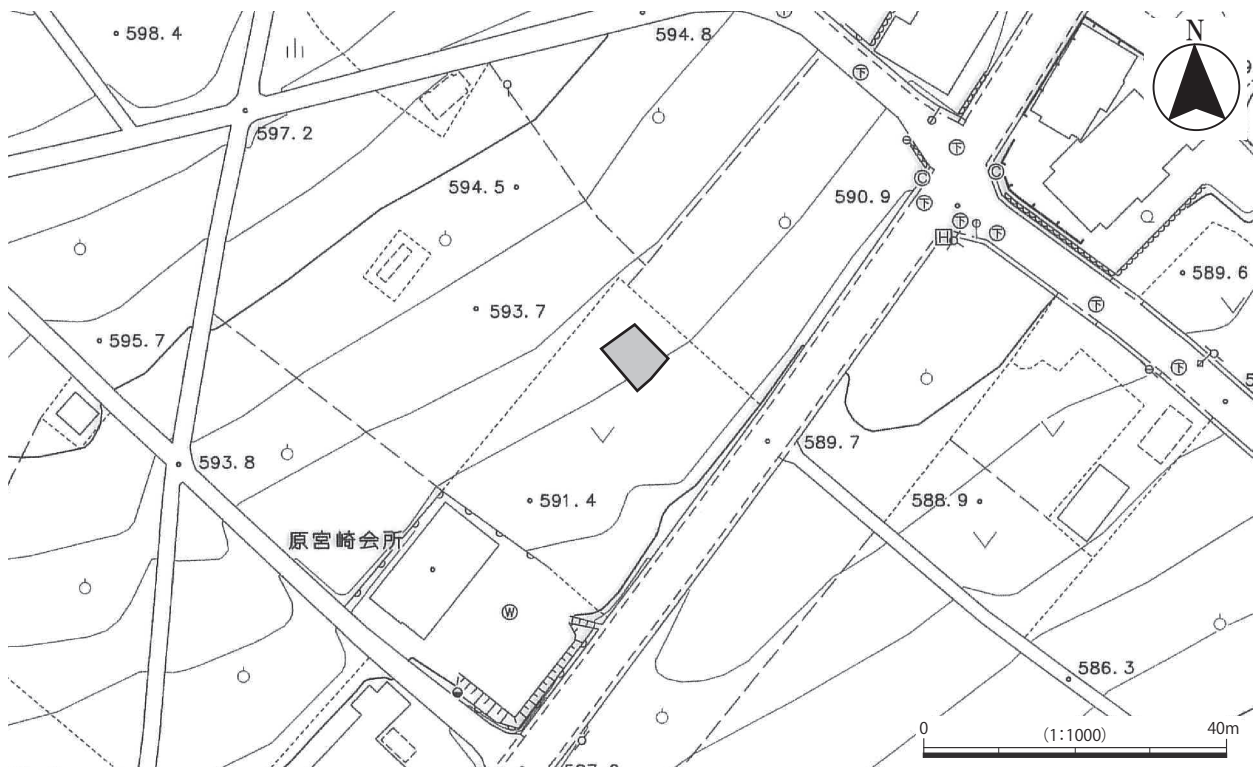


図3 調査位置（2）

区の恒川遺跡群では正倉院が確認されており、恒川官衙遺跡として国史跡となっている。

平安時代末期以降は荘園の開発が進む。室町時代から安土桃山時代にかけて段丘端部や独立丘陵を利用した中世城郭が築かれるが、城歴はほとんど判明していない。この間、下久堅を拠点に勢力を伸ばした知久氏は天文23年（1554）、甲斐の武田氏の侵攻を受けて滅亡する。天正10年（1582）には織田氏が伊那谷に侵攻し、武田氏の勢力は一掃された。その後は徳川氏、豊臣氏などによる支配を経て、近世に幕藩体制のもとで飯田藩の所領となり、最後は堀氏の統治を経て明治を迎えた。

### 第3節 周辺の調査履歴

当遺跡は大門原遺跡とともに、古くから濃密な遺物散布地として知られていた。最初に調査が及んだのは、昭和37年度の災害復旧にともなう土取り工事の合間をぬって実施された発掘調査である（神村1967）。この時把握された9軒の竪穴建物から出土した資料をもとに「座光寺原式」土器が設定された。続いて昭和45年度と47年度に、当遺跡北側に隣接する大門原遺跡において中央道及び座光寺パーキングエリアの調査が実施され、竪穴建物5軒ほか土坑群を検出し、弥生時代後期前半の集落と判明した。（県教委1971・1973）。昭和46年度の大堤団地の調査は、当時「松林遺跡」と呼称されていた地点で実施された。縄文晩期竪穴建物のほか、弥生時代の性格不明の格子状遺構とともに石組の水路状遺構が確認され、報告者は水田耕作のために湧水を集める水利施設と推定している（市教委1972）。今次調査地は遺跡の中央西側に位置し、中央道で把握された大門原遺跡の弥生集落から直線距離にして200mほど南東に位置する。平成30年度から令和元年度にかけて市教委が実施した座光寺スマートIC建設に先立つ確認調査（本書第1章第1節で詳述）により、今次調査地に遺構の分布が確認されたが、他のトレンチでは確認されなかった。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

基本層序は調査区北壁（図4 A-A'）で記録した。地表側からI層とII層に分かれる。I層は黒色の表土（耕作土）が堆積する。II層は明黄褐色のシルト質壤土で、「赤土」と呼称される土層である。ほぼシルトのみで構成され、花崗岩質の礫をわずかに含む。さほどしまりはなく、粘性はみられるが強くない。遺構はII層上面で検出した。地表から遺構検出面までの深さは30～40cmを測る。I層とII層の間に漸移層はなく、遺構の上部は耕作等による影響を多分に受けている。周辺の各トレンチ調査での成果と比べ、本調査地点の深度は比較的浅い。なお、調査地は緩傾斜地であり、地表面は北から南にかけて約7度傾斜している。

### 第2節 遺構と遺物

今次調査で検出・記録した遺構は、竪穴建物1棟（SI001）、土坑1基（SK002）である。

#### SI001（図5、写真図版3・4・5）

**概観：**主軸をN 35° Wに向ける竪穴建物である。主軸長4.3 m、副軸長4.1 mの隅丸方形を呈する。北側は遺構検出面から床面まで20cm程度の埋土厚があるのに対し、東側は遺構上部の残存状態が悪く、壁と埋土の大半は消失していた。

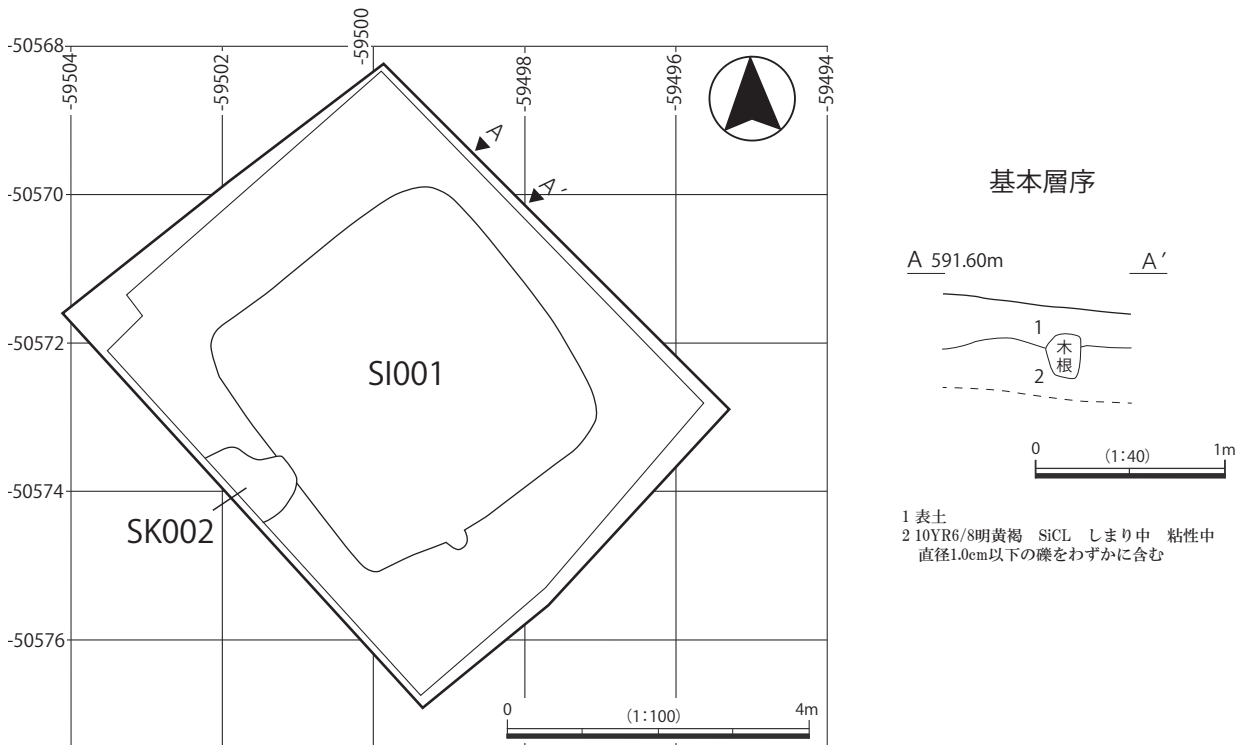
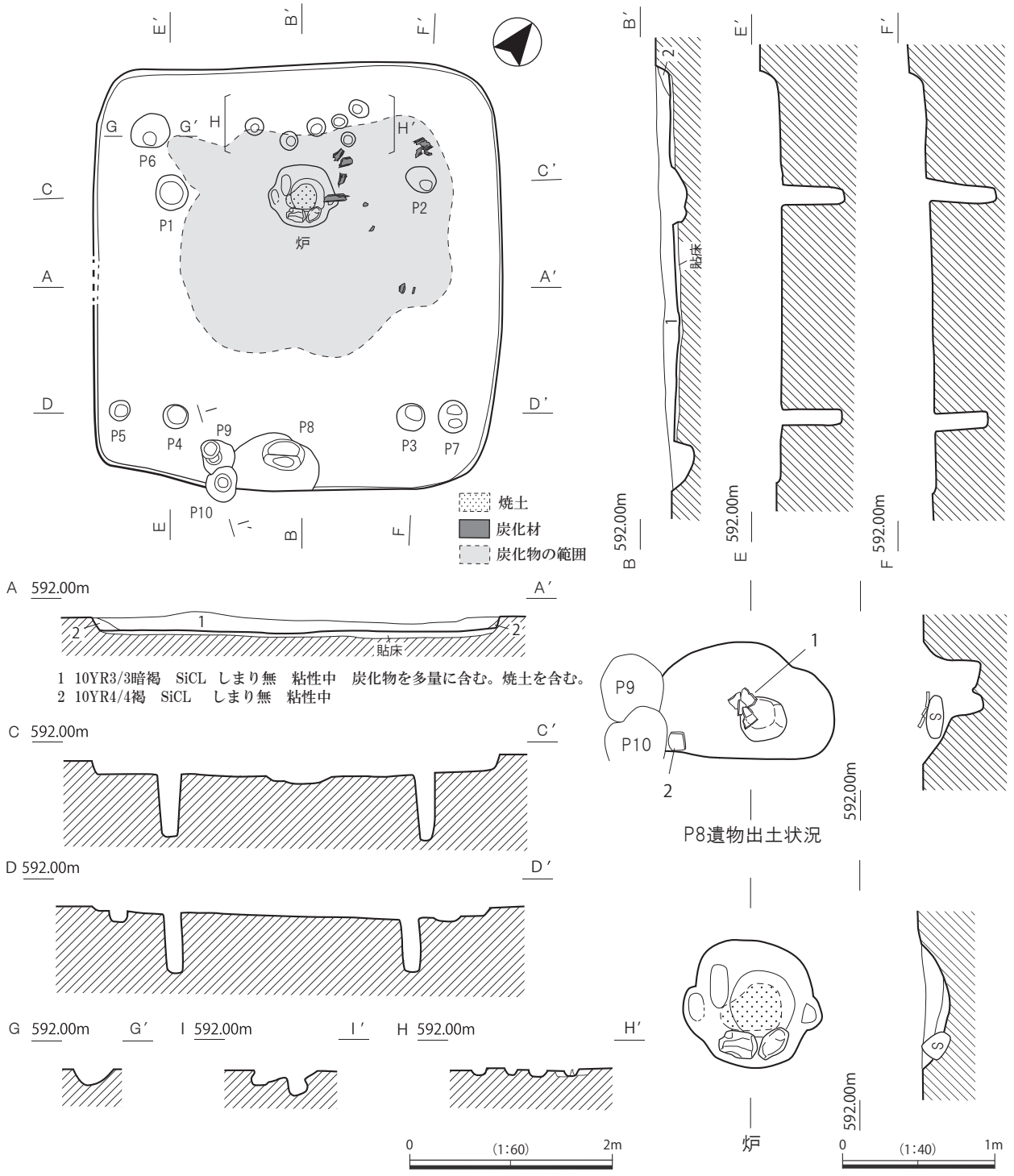


図4 基本層序・遺構分布図



SI001出土遺物

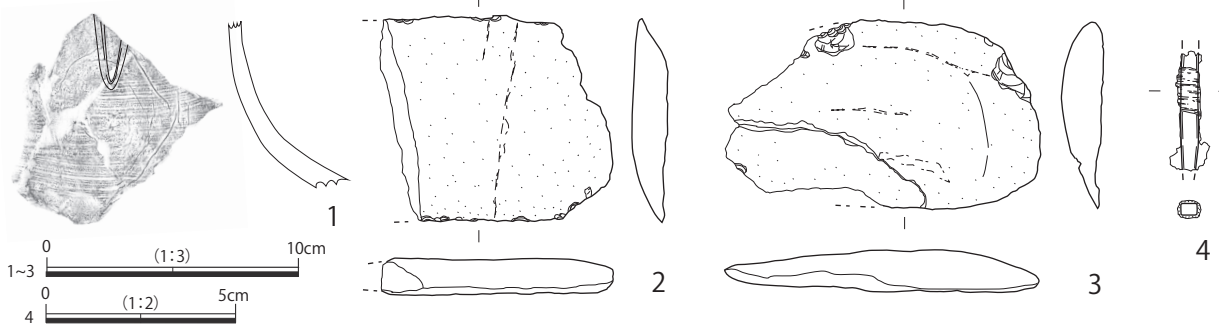


図5 竪穴建物 SI001・同出土遺物

**埋土**：2層からなる。自然に埋没したとみられる。埋土の大半を占める第1層は炭化物を多く含む。  
**床・壁**：貼床は明黄白色の粘土からなり、白色の砂礫を多く含む。3～5cmの厚さで壁際や建物内施設を除くほぼ全面に貼られている。よく叩き締められ硬化しているが、各所に凸凹がみられ、平滑に整えられているとは言い難い。壁は床面から直線的に立ち上がる。

**柱穴**：P1～P4が主柱穴である。直径19～22cmを測る。床面から55～65cmの深さまでほぼ垂直に掘り込まれる。底部は柱の当たりで硬化している。P2には裏込めに小石を多用する。P5～7は主柱穴外側に位置する浅いすり鉢状のピットで、底部は柱の当たり同様に硬く締まる。

**炉**：建物中央奥寄りの床に石囲炉が設置されている。平面形は長楕円形を呈する。長軸長65cm、短軸長60cm、深さは16cmを測る。炉縁石は入口側の2個を除いて外れており、外周部に炉縁石の据え付け痕が少なくとも3か所に残る。炉内には焼土と炭を含む火床が認められる。

**炭化物**：床上の埋土中に少量の焼土をともない炭化物が分布する。形状を保つ炭化物は木材と確認できた。建物内全体に分布し、特に中央から北寄りにかけて濃密となる。主柱穴P2近くに幅15cm、厚さ3～4cm程度の板状の材が残る。以上により、当建物は廃絶時に焼亡したと推定される。

**建物内施設**：P8は南壁に沿って設けられた半円形の土坑である。入口施設とみられ、底部に2か所の深まりがある。内部に直径30cm程度の丸みを帯びた花崗岩礫が置かれ、その直上に壺の破片が敷かれていた。一部の破片のみが選別されており、建物廃絶時に何らかの行為をしたとみられる。南側に2基の小型ピット（P9・10）が隣接する。これらも入口に関わるものであろう。このほか、奥壁寄りの中央付近に直径10～15cm程度の微小なピット6基が並ぶ。

**遺物**：出土量は少ない。図5遺物1は、P8内の花崗岩礫の上から出土した壺形土器である。頸部と胴部の一部が出土した。接合しないが同一個体とみられる。図示した頸部の破片には短線文と櫛描波状文が施され、弥生時代後期の特徴を示す。2・3は硬砂岩製の横刃形の打製石斧。4は主柱穴P4付近の床面から出土した棒状鉄製品で、両端を折損する。残存長3.2cm、最大幅0.4cm、最小幅0.3cm、厚さ0.3cmを測る。断面は長方形で、片側の幅がわずかに狭まる。一部に木質状の有機質が付着する。器種は特定できないが、農工具の茎部の可能性がある。

**時期**：弥生時代後期

SK002（図6、写真図版5）

**概観**：調査区南壁の中央付近で検出した不整形の土坑である。南側は調査区外となり、全体の平面形は不明。北端の一部がSI001と重複するが先後関係は不明。断面での幅170cm、最深部で65cmを測る。

**覆土**：5層からなる。ブロック状の土塊や粘土塊を不規則に含み、人為的な埋没の可能性がある。

**遺物**：石英核1点が出土した。

**時期**：不明

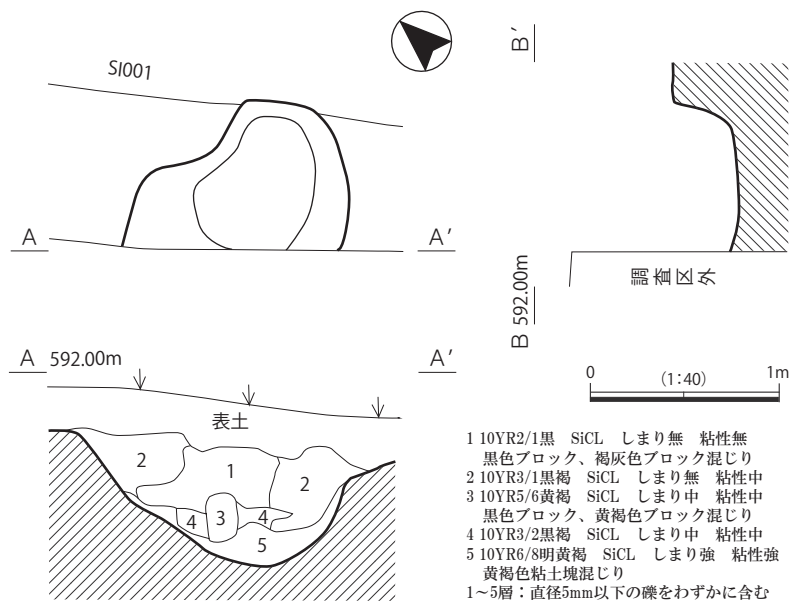


図6 土坑SK002

## 第4章 総括

今回調査した遺構は竪穴建物1棟と土坑1基であった。竪穴建物SI001は遺物の出土量が少なく、焼亡により廃絶しており、比較的短期間のうちに放棄された可能性を示唆する。このことは、高位段丘上の集落の性格を考えるうえで興味深い。また、鉄器も出土した。器種不明の残片とはいえ、石器が卓越し、鉄器がほとんど出土しない当該期としては特筆すべきものである。建物の詳細な時期は特定できないが、土器の特徴からして弥生後期でも最終末段階までは下らない時期とみる。

かつて佐藤甞信、今村善興、神村透らによって調査がされ、編年的位置が定められた座光寺原式土器（神村ほか1967）が当地域の弥生時代後期前半の標識とされているように、当遺跡は研究史上きわめて重要かつ著名な弥生集落である。当該期には集落数が増加し、それまで天竜川に近い低位段丘上を中心に展開したムラが、山麓に近い高位の段丘上にも進出する。座光寺原遺跡はまさにこの高位段丘上の集落の典型例である。ところが、その知名度とは裏腹に、これまでに調査された範囲は一部にすぎず、集落の実態も不明であった。今次調査では、新たに中央道南側に広がる集落の一端を把握したと考えられる。調査地は中央道敷地内の大門原遺跡の弥生集落と同じ扇状地上に位置する。しかし、平成30年度から令和元年度にかけて実施したスマートIC周辺の確認調査結果からわかるように、両者の間には遺構が分布しないことから、それぞれ別の集落とみられる。また、同じ座光寺原遺跡内では、昭和36年度の土取り工事にもなう調査で最初に確認された建物群とも異なる環境にあり、遺跡内に複数の弥生後期集落が存在するとみてよい。現在のところ、これらの時期は概ね「座光寺原式」段階、すなわち弥生後期前半の段階を中心としており、同時期に並存していたか、ごく短期間のうちに移動を繰り返していたということになるだろう。

このように弥生集落の実態が次第に判明していくなかで次に課題となるのは、やはり集落相互の関係性である。先に山下誠一は座光寺地区の調査結果を総括し、低位段丘上の拠点集落（恒川遺跡群など）から高位段丘の集落（座光寺原遺跡、座光寺中島遺跡など）への移住・拡散モデルを提示し、集団関係の説明を試行している（山下2000）。今後予定されているリニア関連道路整備では、当遺跡の南側を含め、その他の高位段丘に広がる集落遺跡の調査が進展する見込みである。今次調査を嚆矢として、集落間関係を明らかにしうる成果が増加することを期待し、まとめとしたい。

### 引用・参考文献

- 神村 透ほか 1967 『長野県考古学会誌』第4号（下伊那の弥生文化特集号）  
山下 誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向 —発掘された竪穴住居址を基にして—」『飯田市美術博物館紀要』第10号

下伊那地質誌編集委員会（編）1976 『下伊那の地質解説』

### 報告書

- 神村 透 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』第4号（下伊那の弥生文化特集号）  
飯田市教育委員会 1972 『松林遺跡 緊急発掘調査報告書』  
飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』  
長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田地区—』  
長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市地内その2—』



調査区および確認調査地（座光寺スマートIC）



調査区上空からリニア中央新幹線長野県駅予定地方向を望む





SI001 全景



SI001 床上炭化物・炭化材検出状況



SI001 炉



SI001 P 8 遺物出土状況



SI001 奥壁付近小ピット群



SK002



SK002  
土層断面（調査区南壁）



1



2



4



3

SI001 出土土器・石器・鉄器



確認調査トレンチ 1 調査前



確認調査トレンチ 1 全景



確認調査トレンチ 5 全景



確認調査トレンチ 6 調査前



確認調査トレンチ 6 全景



確認調査トレンチ 9 調査前



確認調査トレンチ9全景



確認調査トレンチ12全景



確認調査トレンチ15全景  
(奥が本調査地点)

## 報告書抄録

ふりがな	ごこうじばらいせき					
書名	座光寺原遺跡					
副書名	座光寺スマート IC 接続道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2022年 3 月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
ごこうじばらいせき 座光寺原遺跡	いだしごこうじ 飯田市座光寺 211-3	20205	35°	137°	2021/11/15	38.6㎡
		12	32' 32"	50' 37"	~ 2021/11/18	緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
座光寺原遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物 1 土坑1		弥生土器、石器、 鉄器	
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 山麓部扇状地に営まれた弥生集落の一端を把握</li> <li>・ 弥生後期の竪穴建物 1 棟、時期不明の土坑 1 基を記録保存</li> <li>・ 土器、石器、鉄器が出土</li> <li>・ 本調査前に実施した座光寺スマート IC 関連確認調査結果も収録</li> </ul>					

# 座光寺原遺跡

座光寺スマートIC接続道路建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2022(令和4)年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

長野県飯田市教育委員会

印刷・製本 有限会社飯田写真印刷